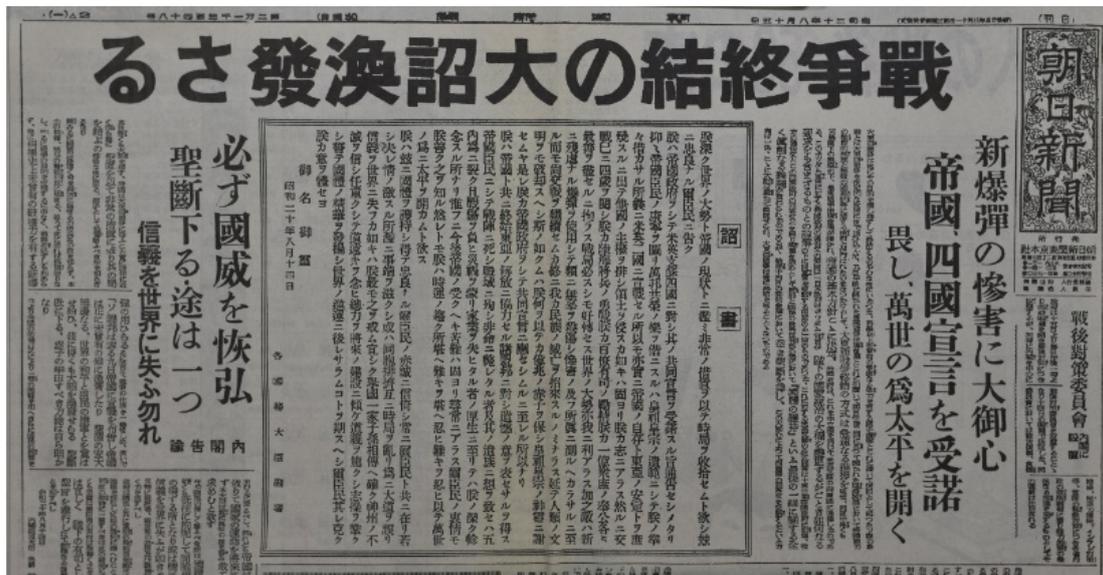


(7) 1945年8月15日

療養所長と加藤は、8月10日頃から新聞の論調が変わり始めたことに気づいた。「本土決戦」「焦土作戦」「一億玉砕」の文字が消えて、「皇国護持」(『秋田魁新報』8月10日)、「国体護持」(『読売報知』8月11日)、「大御心を奉戴 最悪の事態に一億団結」(『朝日新聞』8月12日)、「私心を去り国体護持へ」(『毎日新聞』8月13日)が強調されはじめた。



8月14日、政府は御前会議を開き、ポツダム宣言について議論を交わしたが、結局、天皇の「聖断」によって、ポツダム宣言の受諾、すなわち無条件降伏を決めた。(上写真は1945年8月15日『朝日新聞』)

8月15日正午、いわゆる「玉音放送」を聞いた。加藤は天にも昇るような思いであったが、事務長は「これはどういうことですか」と所長に尋ねた。事務長はじめ診療所の要職にある人は沈鬱の表情をしていた。しかし、平職員で涙を流した者はひとりもなく、若い娘たちは朗らかに歌を歌い、笑い転がっていた。大日本帝国に対する組み込まれ度の違いが、敗戦という事実の受け取り方の違いとなって表れたのである。

しかし、「玉音放送」の効果は抜群で、「一億玉砕」「鬼畜米英」は一夜にして雲散霧消し、何事もなかったかのように、「平和国家建設」「ようこそアメリカさん」に衣替えしたのである。所長や加藤を避けていた職員は、親近感を示しながら近づいてくる。なんという無節操！ なんという変わり身の早さ。これは加藤には衝撃的であった。「いったい日本人のものの考え方とは、どういうものなのか」。これが加藤の生涯を通じての主題となるのである。